

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書

10カ月のアメリカ留学を当初の留学の目的と照らし合わせながら振り返る。教師を目指すにあたって、留学を通して、小学校における外国語活動に役立つ授業のテクニックを学ぶこと、英語力の向上、多くの人との交流や体験を通して教師としての資質を養うことが目的である。これらの三つの目的をどのように達成できたかを留学先での思い出や経験、感じたことを交えながら述べていく。

一つ目の目的は、アメリカの教育から小学校の外国語教育に生かせることを学ぶことである。日本が理想とする教育であるアメリカのアクティブラーニングを実際に観察実習や幼稚園実習を通して自分の目で見て学んだ。また、指導方法や文化などの、教育に関する授業を受ける中で、アメリカの教育が焦点を当てている“創造性”の重要性について考えさせられた。振り返ってみると、外国語教育に限らず、教育という広い面で新しい考え方や日本の教育に取り入れたい部分を学ぶことができたと感じる。大学付属の小学校での観察実習や幼稚園実習では、児童の主体的な学習の姿勢や指導を工夫する教師の姿が多く見られた。中でも、印象的だったのが算数の授業だった。授業の最初は、担任教師が児童に質問をしながら答え方を導いたり、児童が出す様々な答え方の理由を聞いたりする中で、授業が進められていた。担任教師は児童の意見や考えを質問の中で引き出し、それらを基に授業が進められているため、児童が主体的に学ぶ様子が見られ、授業が自然な流れで行われていた。教師は発問に対し予想される児童の答えや考えをあらかじめ考えておき、どのように児童を導いていくかが大切だと感じた。アクティブラーニングというのは、児童が主体的に学ぶために教師がどのように指導の工夫をしていくのかが非常に重要である。後半では、クラスをグループに分け、それぞれのグループに違うタスクを与え、ローテーションさせていた。そのタスクの中には、教科書の問題を解く、解いた問題を担任教師と答えを確認する、算数に関わるゲームをする、などがあった。クラスには担任だけでなく補助の教員もいるため、様々なタスクに取り組む児童全体に行き届く細やかな指導が可能だった。また、児童は教師に直接質問し問題解決できる時間が用意されているため、苦手意識を感じる児童にとっても配慮されていると感じた。さらに、様々なタスクに取り組むため、一つの活動に長時間取り組むよりも児童は飽きずに集中して取り組めると感じた。この1つの授業の中だけで、アクティブラーニングを導入するためのヒント、少

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書

人数教育やチームティーチングの効果、グループ活動の可能性など、日本の教育の中にも取り込める点を得ることができた。アメリカと日本はもともと文化の違いが大きいため、アメリカ教育の全てを無理矢理日本の教育に持ち込むことは厳しいと思う。しかし、今の日本の教育が求める児童の主体的、対話的で深い学びを実現させるには、上で述べたアメリカ教育に見られるメリットを取り入れるべきだと考える。大学で取っていた授業は主に教育に関する授業で、アメリカ教育入門や音楽や美術の指導方法、多文化教育、児童文学、幼児児童への創造的な活動だった。授業の内容はそれぞれ異なるが、全ての授業で共通していたことは創造性“Creativity”を重視した教育だった。音楽や美術の指導方法、児童文学の授業の中で、教授が提案したクラスの中での活動は、どれも自由度が高いもので児童の創造性を高めることを目的としたものだった。算数や国語などの主要教科を重視していた私にとって、音楽や美術などの技能教科に児童の創造性を高めるという面で可能性があることに気づいたことは良い経験だった。創造性を高めるということは、新たな発見や思考力を高める上において重要であり、児童が問題解決能力を身に付けるために必要である。日本の教育は私が感じていたように、主要教科に焦点を当てる傾向があったが、技能教科にも目を向けることが重要であると感じた。特に美術の指導方法を学ぶ授業の中では、学生も実際に美術の活動に取り組むが、私のクラスメイトはアイデアを豊富に持っており、そういう点においてアメリカ教育の創造性を重視した教育の良さを感じた。一つ目の目的の達成状況としては、小学校の外国語教育に使えるというより教育全般において学ぶことができたと思う。

二つ目の目的は英語力の向上である。留学当初の私の英語力は私が思っていたよりも低く、最初はかなり落ち込んだ。秋学期の最初の授業では教授やクラスメイトが話していることがほとんどわからず、毎日悔しい思いをしていたことを覚えている。とにかく積極的に話しかけ、友達を作り、リスニングとスピーキング力を高めることを努力した。三か月ほど経つと自然とリスニングとスピーキング力はつき、授業や友達との会話にもついていけるように感じた。それらの力に満足する中で、次に、語彙力の無さを感じた。そこで、友達との会話の中で出てきた新しい単語や授業の教材の中で出会った新しい語彙を覚えて実際に使うように過ごした。秋学期が終わるころには、ほどよい緊張感で授業を受け、友達とは自信をもって英語で会話することができるようになった。春

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書

学期に入ってから、リスニング力が少し落ちてしまったように感じ、友達との会話のほかにも英語の動画や映画を見ることでリスニング力をキープするように努力した。語学力について振り返ると、私は留学という日本での英語学習環境とは全く違う英語のネイティブスピーカーがいる環境の中で、英語を学べるということで、特にスピーキング力とリスニング力を向上させることに力を入れていた。そのため、リーディング力とライティング力は前に挙げた二つの能力のような上達はできななかったと感じる。リーディング力とライティング力は留学前と比べるとかなり上がったが、もっと英語で本や文献を読む機会を増やせばよかったという後悔もある。全体として、もちろん英語力は上がり、日本に帰ってきてからも外国人の方へ道案内をしたり、旅行先で出会った外国人の方と話したりするなど、英語力向上の実感と英語が使えることによる豊かさを感じた。しかし、語学力の向上にはゴールはなく、努力すればするほど身につくものである。留学による自分の今の語学力に満足せず、それをモチベーションとしてこれからも学習を続けていく。

三つ目の目的は、アメリカでの文化や交流による体験である。アメリカでの人々と関わる中で感じたことは文化の違いである。特にアジア人の考え方とアメリカ人の考え方に違いがあると感じた。もちろん個人差や人によって多様ではあると思うが、一般的にアメリカ人はオープンで誰にでもフレンドリーである。というのも、きっとアメリカの自由で多様な文化と関連しているからである。それだけでなく、アメリカ人は今というときを楽しむ傾向にあり、日本人などのアジア人は先のことを考えて行動する傾向にある。こういう考え方や行動の違いは遊びに行くときや話し合いをするときなどに感じた。どの考え方や文化にも長所と短所があり、私はその違いを楽しみ、相手の文化や考え方を尊敬しながらいろいろな背景をもつ人々と過ごすことができた。アメリカという国は多様な文化が入り混じっており、相手の意見や考え方も尊重しつつ、自分の意見も主張するということが、人々がそのような環境の中で快適に暮らすために重要なことだと感じた。これを実際に感じながら経験できたことはとても大きな意味を持つと思う。それは、日本は単一国家であり、日本人と多く接するため、日本にいたらそのように感じることはないからである。日本の相手を思いやる文化は日本の文化として誇れるが、グローバル化し、多様な文化や人々が日本においても増えてくるという状況にあたって、そのような経験がと

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書

でも重要であると思う。アメリカでの人々との交流の中で、多文化理解だけでなく、自文化理解をすることもできた。グローバル化の中で多文化理解へ目を向けがちであるが、他の国に身を置くことで、海外から見る日本の姿や文化に気づくことができた。これは教師になるにあたって、児童に理解してもらいたいところでもあり、私自身が体験し感じた生の情報を児童に伝えられることができると思った。

これまで三つの目的を基に留学の成果を振り返ってきた。語学力向上はもちろんのこと、留学したからこそ学べた教育や異文化理解を通して、教師になる資質を身に付けることができた。また自分の物事への考え方も多角的で豊かなものになった。そして、留学前よりも自分に自信がついたことが帰国して一番に感じたことである。留学は学習面だけでなく、精神面にもかなり影響を及ぼすものだった。留学から学んだことをこれからの人生に生かし、留学を通して得たモチベーションをこれからのさらなる語学力と教師としての資質の向上につなげたい。



ケンタッキーの大学近くにある湖とハイキングのできる山です。ケンタッキーは自然がきれいなところで、週末にはよく友達と出かけていました。



(別紙様式4 B)

卒業(大学生等コース)留学結果報告書



ケンタッキーでの生活は優しい人々に恵まれ、とても充実していました。ケンタッキーはダービーで有名なため、キーンランドというところに行ったり、学校では多文化を祝うイベントがあったりした。そのほかに



クリスマスはホストファミリーと過ごし、伝統的なアメリカでのクリスマスを楽しんだ。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書



小学校における図画工作の指導法の授業の中で学んだ作品である。これはアイシングに色素を付け、違う色を混ぜて他の色をつくったり、自分でデザインをしたりするものである。クラッカーの上にアイシングをのせるため、作品自体食べることができるという楽しい作品である。



友達とホームパーティーをしたときに作ったアメリカ南部地方の家庭的な料理と日本の家庭的な料理である。友達と一緒に料理をすることがとても多く、そのたびに文化の違いやいろいろな話題が生まれ、会話が弾む時間だった。